

52 リヨンにおける医学小史(一)

ークロード・ベルナル博物館ー

小林 晶

フランスのリヨンは人口百二〇万を有する、パリに次ぐ第二の都市である。古くはゴール時代の首府であり、絹産業でわが国とも少なからず交流をもった都市である。現在は化学・機械産業が周辺に集中し、EU内の流通の中心の一つになっている。

医学の分野でも中世以来の伝統をもち、世界的に貢献した多くの医学者を輩出している。現在WHOの国際がん研究センターが置かれているのもここである。因みに人口に膾炙している、リヨンに関係ある医学者は次のような人達である。

François RABELAIS (1494-?) , Marie François Xavier BICHAT (1771-1802) , Charles Gabriel PRAVAZ (1791-1853) , Léopold OLLIER (1810-1900) ,

Claude BERNARD (1813-1878) , Antonin PONCET (1849-1913) , Léo TESTUT (1849-1925) , Alexis CARREL (1873-1941) , Jules FROMENT (1878-1946) , René LERICHE (1879-1955) , Jean LEPINE (1876-1967)
などである。

私は一九六一年以来度々この地に留学した縁で、総論的な紹介を含め、逐次今後本会員に紹介したいと考える。今回はクロード・ベルナル博物館について紹介する。

この博物館はリヨンの東北約五〇キロの、サン・ジュリアン・アン・ボージョレにある。周辺はブルゴーニュの最南端にあたり、一面のブドウ畑に囲まれている。建物はもと地主のもので三階よりなり、裏にクロードの生家が連なっている。彼は一八一三年七月十二日ここに生まれた。隣町のヴィルフランシュ・シュール・ソーヌのコレージュを卒業した後、リヨンの薬局で徒弟となった。文才を自負していた彼は「ブルターニュのアルチュール」という悲劇作品を書いてパリに赴いたが、シラルダンに酷評され、すでに心にあつた医学への道を歩むこと

になった。パリで医学を終え、四三年コレージュ・ド・フランスのマジャンディの門を叩いた。

四五年にはすでに科学アカデミー賞を実験生理学領域で獲得している。四七年には若年ながらマジャンディの後任として、コレージュ・ド・フランスの教授に就任する。この年には生物学会の初代会長にも指名されている。

五四年には科学アカデミーの会員となり、ソルボンヌ大生生理学講座の担当もしている。六五年有名な「実験医学研究序説 (Introduction à l'Etude de la Médecine Expérimentale)」を出版している。以後、六八年にはフランスアカデミーの会員、六九年には上院議員になり、七八年二月十日逝去した。科学者としては最初の国葬が営まれ、ペール・ラシェーズ墓地に葬られた。

生前の業績は枚挙にいとまはないが、主なものを挙げれば、脾臓、肝臓、交感神経、脳神経、鼓索などの機能、クラーレ・一酸化炭素の作用の解明、および内部環境の提唱などにあると言えよう。

博物館の第一室はサン・ジュリアン時代の実験器具、「実験医学研究序説」の原稿、六一年ギユメが描いたポ

ートレート、科学アカデミーの制服などが展示されている。第二室は弟子たちとの共同実験用具が並べられ、第三室には政治家として活躍した第二帝制下および第三共和制時代のものが展示されている。第四室は小作人として父親が、さらに彼が後年所有したブドー畑の栽培に使用された器具がある。この一隅にはアカデミー会員と上院議員用の制服も飾られている。

二階への階段の壁にはレルミットが描いた「クロード・ベルナルの授業」と題する百号に近い絵の複製が掲げられている。

第五室は彼自身の実験用器具があり、動物用の人工呼吸器や動物固定台などもある。その他多くの論文、論説なども陳列されている。

色を添えるのは六九年夫人と離婚後、ロシア貴族のラファローヴィッチ夫人との交遊における多数の手紙である。

(福岡整形外科病院)